

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 20 日現在

機関番号：33902

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22530633

研究課題名（和文）失語症患者と家族介護者に対する心理社会的教育介入プログラムの開発

研究課題名（英文）Development of psychosocial educational intervention program for adults with aphasia and their family members

研究代表者

辰巳 寛（TATSUMI HIROSHI）

愛知学院大学・心身科学部・准教授

研究者番号：70514058

研究成果の概要（和文）：失語症患者を支える家族は、さまざまな心理社会的負担が生じやすい。本研究では、家族のコミュニケーション自己効力感や負担感、精神的健康の実態を調査し、教育的介入が及ぼす効果を検証した。結果、家族のコミュニケーション自己効力感を高める専門的介入の重要性と、失語症に関連する情報提供や対処法などの短期の教育的介入の有効性を確認した。

研究成果の概要（英文）：The family members of adults with aphasia tend to develop diverse psychosocial burdens. In the present study, we examined the actual conditions of the communication self-efficacy of families, their feelings of burden, and their mental health and investigated the effectiveness of instructional interventions. The results of a covariate structural analysis showed that the communication self-efficacy of families had a strong impact on mental health via feelings of burden. Special interventions providing information on aphasia and coping behaviors were clearly significant, increasing the self-efficacy of families.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,600,000	480,000	2,080,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
総計	2,600,000	780,000	3,380,000

研究分野：言語聴覚障害学

科研費の分科・細目：社会学・社会福祉

キーワード：失語症・家族介護者・自己効力感・介護負担感・教育介入

1. 研究開始当初の背景

我が国の失語症患者数は50万人を超え、高齢化社会を背景に、その数は増加の一途にある。慢性期の失語症患者が入院加療にて言語治療を受けることは困難な状況であることから、在宅での長期に及ぶリハビリの重要性が高まってきた。在宅リハビリでは、疾病の問題だけでなく、心理的問題や人間関係・家族関係、社会福祉制度・地域社会との関係など複雑な問題が錯綜する。リハビリテ

ーション医療の目的は、患者と家族の身体的・心理的・社会的次元における最大限の回復である。それゆえに、失語症患者へのリハビリでは、言語障害に対する機能訓練だけではなく、患者と家族が抱える心理社会的問題も対象とした包括的アプローチが求められている。しかし、本邦においては、失語症患者と家族介護者に対する心理社会的問題に関する介入研究は少ない。

一方、在宅リハビリを提供する現場では、

患者と家族が抱える諸問題に直面することが多く、利用者側の生活の質 (Quality of Life:QOL) と介護負担感を評価した上での、適格な介入が必要である。Stroke and Aphasia Quality of Life-39 (SAQOL-39)

(Hilari K et al.2003) の標準化、日本語版 Zarit 介護負担尺度 (J-ZBI) を用いた失語症家族の介護負担度調査などの研究を経て、新たな問題として、介護負担感に強く影響を及ぼす心理的要因である「自己効力感」(Self-Efficacy :SE) の評価の必要性、および失語症患者に特有の脳卒中後うつ病性障害(Post-Stroke Depression:PSD) の評価の必要性が明らかとなった。こうした点を踏まえた上で、失語症患者と家族介護者に対する効果的な心理社会的介入プログラムを開発することが重要な臨床課題となった。

2. 研究の目的

特有のコミュニケーション障害を呈する失語症患者は、他者との関係が希薄になることにより実存的危機に直面しやすい。また、彼らを支援する家族介護者は、患者との意思疎通が難しい状況下では、充分に行き届いたケアができず高度のストレス状態に陥る。そのため、失語症患者とその家族介護者には様々な心理社会的問題が生じやすい。

本研究では、失語症患者および家族に対する心理社会的教育介入プログラムを開発し、その臨床的有用性についての実証的検証を行うことを目的とした。

本研究は以下の4つのプログラムから構成されている。

- (1) 失語症患者と家族介護者のコミュニケーション障害に対する自己効力感に関する研究。
- (2) 失語症患者の脳卒中後抑うつ症状に関する研究。
- (3) 失語症患者の家族のコミュニケーション自己効力感と介護負担感および精神的健康との関係性についての研究。
- (4) 在宅失語症患者の家族介護者に対する教育的介入効果に関する実証研究。

3. 研究の方法

「失語症患者と家族介護者のコミュニケーション障害に対する自己効力感に関する研究」については86組の、「失語症患者の脳卒中後抑うつ症状に関する研究」については、77組の、「失語症患者の家族のコミュニケーション自己効力感と介護負担感および精神的健康との関係性についての研究」については110組の失語症患者とその家族介護者を対象に、失語症患者には個別面談を、家族には留置法にてアンケート調査を実施した。

「在宅失語症患者と家族介護者に対する教育的介入効果に関する実証研究」では、訪

問言語治療リハビリテーションのサービスを利用中の失語症患者とその家族介護者に対して、教育的支援サービスへの案内文書を提示し、参加の同意が得られた家族11組を対象とした。対照群は設定しない前後比較試験であり、評価は介入の前後に自記式質問紙を用いて行った。

4. 研究成果

(1) 「失語症者の家族介護者におけるコミュニケーション自己効力感評価尺度

(Communication Self-Efficacy Scale:CSE) の開発」

失語症者とのコミュニケーション (COM) に対する家族の自己効力感評価尺度を開発した。予備調査による内容的妥当性の検証を経て、16項目からなるCOM自己効力感尺度

(Communication Self-Efficacy Scale : CSE) の原案を作成した。本調査では、失語症者の

家族介護者86名にCSEと一般性セルフ・エフィカシー尺度(GSES)、Zarit介護負担感尺度(ZBI)、コミュニケーション介護負担感尺度(COM-B)、抑うつ評価尺度(GDS-15)を実施した。その結果、CSEの欠損値比率は0.7%

で、天井・床効果を示した項目はなく、Good-poor分析にて全項目の識別力を確認した。探索的因子分析では3因子が抽出され因子の妥当性を確認した。CSE総得点とGSES、ZBIとの相関はそれぞれ $r_s=0.215$ 、 -0.335 、COM-B(4因子)との相関は $r_s=-0.317\sim-0.440$ と有意であった。CSEのCronbach's α 係数は0.938で内的整合性は優れていた。CSEは失語症者とのコミュニケーション場面に特化した家族の自己効力感を評価する尺度として高い妥当性と信頼性を有しており、臨床的有用性を十分に備えたスケールであると判断した。

(2) 「The 10-item Stroke Aphasia Depression Questionnaire 日本語版 (J-SADQ10) の開発：信頼性と妥当性についての基礎的検討」

脳卒中後の抑うつ症状(Post-Stroke Depression: PSD)は、リハビリテーションの重大な阻害要因であり、PSDの早期発見と早期介入は重要な臨床的課題の一つである。本研究では、Sutcliffe & Lincoln(1998)が開発したThe 10-item Stroke Aphasia Depression Questionnaireの日本語版

(J-SADQ10)を作成し、その信頼性と妥当性を検証することを目的とした。対象は失語症患者とその家族介護者の77組であった。失語症患者には個別面談を、家族には留置法にてアンケート調査を実施した。失語症者は全例右利き左半球損傷例に限定した。失語症患者には(1) Geriatric Depression Scale 短縮版(GDS-15)、(2) Hamilton うつ尺度

(Hamilton's Rating Scale for Depression : HAM-D)を実施した。家族介護者には(1)

J-SADQ10、(2)失語症患者の日常生活動作評価(Physical Self-Maintenance Scale: PSMS)を実施した。約1週間後にJ-SADQ10を再評価した。信頼性はCronbachの α 係数とGuttmanの折半法信頼係数、再テスト法による級内相関係数ICCを算出した。妥当性はGDS-15とHAM-D、PSMSを妥当係数とし、J-SADQ10とのSpearmanの順位相関係数にて検証した。結果は、J-SADQ10のCronbachの α 係数は0.758、Guttmanの折半法信頼係数は0.692であった。再テスト法によるICCは0.920で、J-SADQの内的整合性と安定性を確認した。また、GDS-15との相関は $r^s=0.284$ ($p=0.012$)、HAM-D(17項目)は $r^s=0.526$ ($p=0.014$)、HADM-D(21項目)は $r^s=0.529$ ($p=0.014$)、PSMSは $r^s=-0.295$ ($p=0.009$)で基準関連妥当性を確認した。失語症患者の客観的抑うつ評価質問紙であるJ-SADQ10の信頼性と妥当性について検証し、その臨床的有用性を確認した。

(3)「失語症患者の家族のコミュニケーション自己効力感と介護負担感および精神的健康との関係性について」

失語症患者とのコミュニケーション(Com)に対する家族の自己効力感と介護負担感および精神的健康との関係性について共分散構造分析SEMにて検証した。対象は110組の失語症患者と家族介護者であった。研究の趣旨を説明し書面による同意を得た家族に対してCom自己効力感尺度(CSES)、Com負担感尺度(COM-B)、GDS-15、SF-8を実施した。解析方法は、1)CSESを家族性別・続柄・失語重症度・失語タイプ毎の比較を行い、2)CSESと他尺度との相関を算出した。SEMでは、観測変数(CSES・COM-B・SF-8〔精神的スコア〕とGDS-15)より構成概念(Com効力感・Com負担感・精神的健康)を設定し、それらの関係についてモデルを作成し適合度を判定した。結果は、失語症患者の平均年齢 65.7 ± 13.3 歳、男性比64.5%、失語重症度(軽度/中等度/重度)53/38/19名、失語タイプ(ブローカ/ウェルニッケ/その他)58/19/33名、家族の平均年齢 61.2 ± 13.1 歳、女性比74.6%、平均介護期間88カ月、配偶者比77.3%であった。1)CSESは失語重症度と失語タイプの間で差を認めた。2)CSESは介護期間、失語重症度、COM-B、GDS-15と有意な負の相関を認めた。SEMでは、適合判定に統計学的許容水準を満たしたモデル(CMIN ≈ 1.043 , df=24, $p=0.9998$, GFI ≈ 0.9982 , AGFI ≈ 0.9874 , CFI ≈ 1.000 , RMSEA ≈ 0.0000)で、効力感から負担感への係数 -0.531 ($p<0.001$)、負担感から精神的健康 -0.798 ($p<0.001$)であった。失語症患者の家族のCom自己効力感は、失語症の重症度やタイプ間で相違し、介護負担感や精神的健康との関連が示唆された。SEMの結果、Com効力感とCom負担感に、Com

負担感と精神的健康に強く影響を及ぼしており、失語症患者の家族の精神的健康を保守するためには、家族のCom自己効力感を高め、介護負担感を軽減する専門的介入が必要であることが明らかとなった。本研究の知見は、失語症患者の家族に対する心理社会的支援プログラムの開発に新たな示唆を与えるものと判断した。

(4)「在宅失語症患者の家族介護者に対する教育的介入効果—予備研究報告—」

特有のコミュニケーション障害を呈する失語症患者の家族介護者は、大きな心理社会的負担が生じる。本研究の目的は、失語症患者を支える家族介護者を対象に、教育的介入を行うことで、失語症患者とのコミュニケーションにおける自己効力感や介護負担感、精神的健康に及ぼす効果を確認することである。今回の予備研究では、11例の失語症患者家族に対して、失語症に関する正確な情報提供やコミュニケーション障害への対処法などの短期の心理・教育的介入を行い、複数の自記式質問紙(コミュニケーション自己効力感尺度CSES、コミュニケーション介護負担感尺度COM-B、GDS-15)を用いて評価を行った。その結果、CSES総得点と下位項目の「会話環境への配慮」に関する自己効力感に有意な改善を確認したが、COM-BやGDS-15には著変を認めなかった。教育的介入効果の判定には、対象家族の個別性を配慮した上で、長期間にわたる無作為化比較研究による検証が必要であることは判明した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計15件)

- ① 辰巳 寛, 山本 正彦ら(5名): 言語聴覚士による聴覚印象評価の信頼性について—『<発語失行症>話しことばの評価票』を用いた検討—, 言語聴覚療法学, 10・1, 2013〔査読付〕
- ② 辰巳 寛, 山本 正彦, 仲秋 秀太郎, 波多野 和夫: The 10-item Stroke Aphasia Depression Questionnaire 日本語版(J-SADQ10)の開発: 信頼性と妥当性についての基礎的検討, 総合リハビリテーション, 40・6, pp. 887-892, 2012〔査読付〕
- ③ 辰巳 寛, 山本 正彦: Mild Cognitive Impairment(MCI)におけるQuality of Life(QOL)の特徴について— Alzheimer型認知症(ATD)との比較検討—, 心身科学, 4・1, pp. 17-24, 2012〔査読無〕
- ④ 辰巳 寛, 山本 正彦, 仲秋 秀太郎, 波多野 和夫: 失語症者の家族介護者におけるコミュニケーション自己効力感評価尺度(Communication Self-Efficacy

- Scale:CSE) の開発, 高次脳機能研究 32・2, 514-524, 2012 [査読付]
- ⑤ Maki Y, Amari M, Yamaguchi T, Nakaaki S, Yamaguchi H. Anosognosia: patients' distress and self-awareness of deficits in Alzheimer's disease. Am J Alzheimers Dis Other Demen. 2012 Aug;27(5):339-45 [査読付]
- ⑥ Okamura A, Kitabayashi Y, Nakamae T, Kohigashi M, Shibata K, Ishida T, Narumoto J, Morioka C, Kitabayashi M, Kashima A, Tani N, Nakaaki S, Mimura M, Fukui K. Neuropsychological and functional correlates of clock-drawing test in elderly institutionalized patients with schizophrenia. Psychogeriatrics (in press)2012 [査読付]
- ⑦ 辰巳 寛: 認知症の訪問リハビリテーションの実践-軽度認知障害に対する統合的介入について-, 訪問リハビリテーション, 1・5, pp. 329-336, 2011 [査読無]
- ⑧ Torii K, Nakaaki S, Tatsumi H, Banno K, Murata Y, Yamanaka K, Sato J, Narumoto J, Mimura M, Akechi T, Furukawa TA :Reliability and validity of the Japanese version of the Agitation Behaviour in Dementia Scale(ABID) in Alzheimer's disease: Three dimensions of agitated behaviors in dementia, Psychogeriatrics, 11・4, pp. 212-220, 2011 [査読付]
- ⑨ Tatsumi H, Yamamoto M, Nakaaki S, Hadano K, Narumoto J : Utility of the Quality of Life-Alzheimer Disease Scale for Mild Cognitive Impairment, Psychiatry Clin Neurosci, 65・5, pp. 533-534, 2011 [査読付]
- ⑩ Hashimoto N, Nakaaki S, Omori IM, Fujioi J, Noguchi Y, Murata Y, Sato J, Tatsumi H, Torii K, Mimura M, Furukawa TA : Distinct neuropsychological profiles of three major symptom dimensions in obsessive-compulsive disorder, Psychiatry Res, 187・2, pp. 166~173, 2011 [査読付]
- ⑪ 田中誠也, 坂野晴彦, 田中康博, 勝野雅央, 鈴木啓介, 須賀徳明, 橋詰淳, 辰巳 寛, 祖父江元, 山本正彦: 弛緩性ディソシアに対する言語病理学および音響学的検討, 心身科学, 3・1, pp. 35~51, 2011 [査読無]
- ⑫ 杉山裕美, 田中康博, 田中誠也, 高見観, 北村洋子, 古川博雄, 加藤里恵, 辰巳 寛, 山本正彦: 慢性期ディソシアにおける言語治療の検討-音響学的手法を用いた治療効果の評価-, 心身科学, 3・1, pp. 21~34, 2011 [査読無]
- ⑬ 辰巳 寛, 山本正彦: 失語症における発話流暢性評価に関する実態調査 -言語聴覚士養成教育への応用-, 心身科学部紀要, 6, pp. 21~28, 2010 [査読無]
- ⑭ 黒崎芳子, 梅田聡, 寺澤悠理, 加藤元一郎, 辰巳 寛: 脳外傷者の展望記憶に関する検討-存在想起と内容想起における側頭葉と前頭葉の関与の違いについて-, 高次脳機能研究, 30・2, pp. 317~323, 2010 [査読付]
- ⑮ 加藤理恵, 田中誠也, 高見観, 杉山裕美, 北村洋子, 南克浩, 古川博雄, 辰巳 寛, 山本正彦: 構音障害に対する治療効果の音響学的考察, 心身科学, 2・1, pp. 25~36, 2010 [査読無]

6. 研究組織

(1) 研究代表者

辰巳 寛 (TATSUMI HIROSHI)

愛知学院大学・心身科学部・准教授

研究者番号: 70514058

(2) 研究分担者

山本 正彦 (YAMAMOTO MASAHIKO)

愛知学院大学・心身科学部・教授

研究者番号: 40378039

仲秋 秀太郎 (NAKAOKI SYUUTAROU)

慶応義塾大学・医学部・准教授

研究者番号: 80315879

波多野 和夫 (HADANO KAZUO)

佛教大学・社会福祉学部・准教授

研究者番号: 80280791